

奉神礼基礎講座 15、正教聖歌の伝統 10、

Slide 1

みなさん、こんにちは。奉神礼基礎講座 第15、正教聖歌の伝統 10 を始めます。

Slide2

ここ1年、「聖歌のお名前」シリーズとして、トロパリ、コンダク、キノニク、カノン、スティヒラとやってきました。今回、その6弾、「お名前シリーズ」最終回として、ポロキメンとアリルイヤ、讃歌の名前の由来と実践をお話しします。ポロキメンとアリルイヤは3年前の9月に対面で行った奉神礼基礎講座でも取り上げました。このときは「共同の祈り」という視点から、「掛け合いのワザ」に注目しましたが、今回は復習を兼ねて、ポロキメンやアリルイヤの意味、位置づけを確認し、次回、後半実習編として、使徒経の使い方を解説します。

Slide3

ポロキメンとアリルイヤに進む前に、「讃歌」について解説します。「讃歌」というのはちょっと紛らわしくて、正教会で「讃歌」とよばれるものは、宗教音楽で一般に言われる「言偏<sup>ごんべん</sup>」のない賛歌、賛美歌と混同されるので、ここで整理しておきます。

一般にいう賛歌（ごんべんのない賛歌）は、ギリシア語でイムノス、ラテン語でイムヌス、英語の hymn で、詩編唱以外の聖歌全般が広く含まれます。

Slide4

聖歌の話になると必ず出てくるのが聖使徒パウエルがエフェソ人への手紙の一節です。「詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい（エフェソ 5:19）」正教会訳だと「聖詠と歌頌と属神の詩賦」と3種類、書かれています。パウエルは明確に区分していなかったとされますが、大まかに言ってひとつめの詩編、聖詠とは詩編聖詠のほかに旧約聖書の歌全般を表し、三つ目の霊の歌、属神の詩賦はアリルイヤなどのことばにならない喜びの歌、喜びの叫びを指すとされます。

二つ目のグループ、言偏のない「賛歌」、「歌頌」イムノス、は新約の教会になって作られ、歌われた、神を賛美する歌全般を含みます。カトリックの賛歌、プロテスタントの賛美歌、正教会の場合トロパリとかコンダクとかカノンとか、今まで「お名前シリーズ」で解説してきた聖歌は、ほとんどここに含まれます。

Slide5

それに対して、私たちが奉神礼で「讃歌」とよぶ歌は、もっと限



今まで学んだ 聖歌のお名前

- ・ トロパリ (別名:イバコイ、セダレン、エクサポステイラー)
- ・ コンダク
- ・ 領聖詞 キノニク
- ・ カノン
- ・ スティヒラ
- ・ ポロキメン と アリルイヤ
- ・ 讃歌

讃歌	<	賛歌、さんび、聖歌
祭や聖人への敬拝 崇め讃む(ヴェリチャエム)で始まる歌。 ロシアの伝統		聖歌全般(聖詠詩編以外) Hymn イムノス(希)、イムヌス(羅) 神への賛美の歌 賛美歌

一般的に 賛歌、さんび、聖歌

- ・ 詩編と~~賛歌~~と霊的な歌によって (エフェソ5:19、コロサ3:17)
- ・ 聖詠と~~歌頌~~と属神の詩賦によって

讃歌	<	賛歌、さんび
祭や聖人への敬拝 崇め讃む(ヴェリチャエム)で始まる歌。 ロシアの伝統		聖歌全般(聖詠詩編以外) Hymn イムノス(希)、イムヌス(羅) 神への賛美の歌 賛美歌、聖歌

定的で、神を賛美する歌、イムノスの一種ですが、祭や聖人への敬拝を歌う特別の歌です。

#### Slide6

正教会の「讃歌」は、スラブ語でヴェリチャニエ。「ヴェリチャーエム、ヴェリチャーエム・チャ・・・」「崇め讃む」あるいは「讃揚す」ということばで始まります。聖歌の題名は歌の冒頭のことばからつくことが多いのですが、日本語は語順が違うので「讃揚す」が末尾ですが「崇め讃す」「讃揚す」から讃歌とよばれました。

この語順の転倒、ほんとうにややこしくて、外国の CD とか買くと、名前がさっぱりわからない、ということが起こります。「常に福」だってスラブ語だと「ドストイナ・イエスチ」ギリシア語だと「アクション・エスティン」。英語だと It is meet なんて書いてあって、さっぱりわからない。実は「常に福にして・・・真に当たれり」。この「真に当たれり」が題名です。

#### Slide7

この「讃歌」、祭日早課で歌われますが、祭日経などの祈祷書の、どこ探してもありません。実は「讃歌」ヴェリチャニエを歌うのはスラブ系教会の伝統で、スラブに伝道される前にギリシア、ビザンティンで作られた祈祷書には出ていません。

#### Slide8

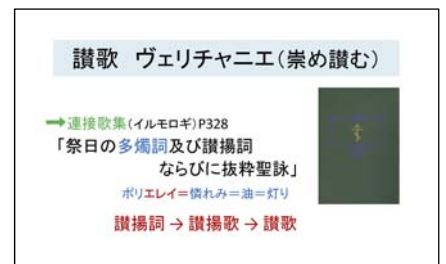
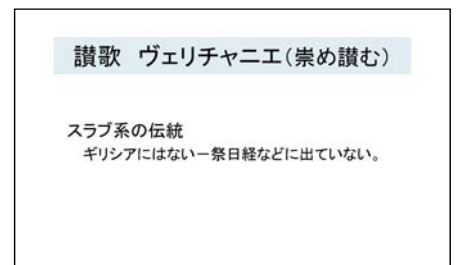
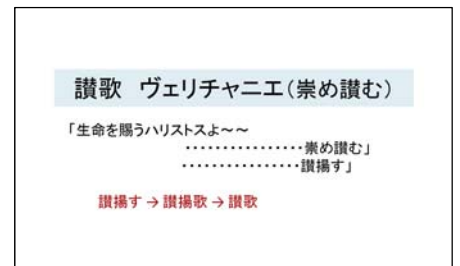
では、何を見ればいいのかというと、『連接歌集』（イルモロギ）、この緑の本の 328 ページに「祭日の多燭詞及び讃揚詞ならびに抜粋聖詠」という項目に出ています。『連接歌集』は聖歌者用のイルモス集ですが、聖歌に必要なテキストがだいたい揃っています。日本では明治 42 年（1909 年）に出版されています。

解説しますと、祭日の多燭詞とは早課のポリエレイのことです。「憐れみ」ということばが何度も出てくる 134-135 聖詠を歌います。ギリシア語で「憐れみ」と「油、オリーブ油」は同じエレイオスということばなので、「憐れみ」と「ともしびの油」が掛詞になっており、「多燭」とは「ともしびがたくさん」すなわち多燭灯＝シャンデリアがともされる時です。

そのあとの「讃揚詞」というのが正教会で言う「讃歌」です。大きな祭日の時、ポリエレイが行われるときに歌われます。

ポリエレイから賛歌の部分は早課の中で最も美しいポイントです。それまで暗かった聖堂に明かりが灯され、古い修道院では長い棒の先に火をつけて、シャンデリアの一本一本にあかりが灯され、王門がさっと開いて、福音書を持った司祭が出てきます。そのあと司祭がゆっくりと全堂炉儀。至聖所から聖所のすべてに香炉を振って歩きます。そのとき歌われるのが「讃歌」です。明治時代は聖歌の名前は定まっていなかったので、讃揚詞あるいは讃揚歌と呼ばれました。それがつづまって「讃歌」。

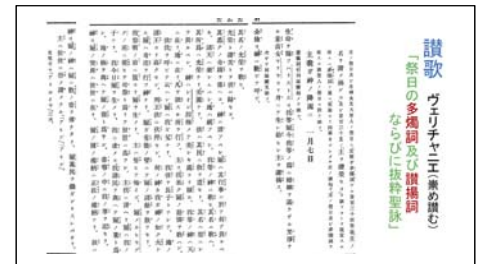
日本の楽譜では 3 回歌うと書いてあることがありますが、必ずしも 3 回、ではなくて「炉儀が終わって、司祭が聖堂中央のアナロイの前に戻るまで」です。小さな聖堂なら 2 回で十分だし、大きな聖堂なら



何回も繰り返します。

### Slide9

『連接歌集』イルモロギを詳しく見てみましょう。降誕祭を例に挙げます。まず「い～の～ち～を、た～もう、ハリストスや」の歌詞が出ています。そのあとに、「次ぎて、同詠隊又歌う」とあって、「全地よ、神に歡びて呼び」と第 65 聖詠が引用されています。「65 聖詠の間に挟んで繰り返さない」という指示です。聖詠に挟むのは正教聖歌の定番です。右、左は、左右の聖歌隊の意味です。



65 聖詠の続きがずっと書いてあって、最後に「光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も代々にアミン」で、「アリルイヤ」3回とあります。

日本の聖堂は小さいので、そんなに何度も繰り返すこともないですが、途中で、聖詠の句を入れると、掛け合い風になって変化が出るし、聖歌隊も一息付けます。四声のこの歌、ソプラノが高くてなかなかしんどいので、間に聖詠の句を入れて一息付けると楽かもしれないと思いますよ。

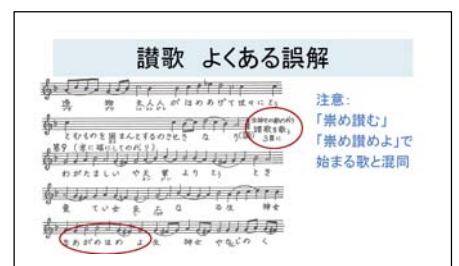
### Slide10

そのほか讃歌が歌われるのは、修道院で、毎朝の祈りのとき、その修道院を創設した聖人、たとえば至聖三者修道院だったら聖セルギイ、キエフの洞窟修道院だったら、聖アントニーとフェオドシーなどの聖人の不朽体に敬拝が行われ、その時に歌われます。写真は聖セルギイの不朽体ですが、朝の祈りの終わりにガラスの蓋が開き、列を作って順番に、修道士、巡礼の聖職者、一般信徒の男性、女性が顔の覆いに接吻します。すべてが終わるのに 30 分以上かかったと思います。その間、讃歌が歌われます。日本人にはなかなかピンときませんが、古い正教国では聖人との結び付きがとても強く、たくさんの方が参列していました。



### Slide11

それから「よくある誤解」について説明します。楽譜、祭日の茶色の楽譜のイルモス第 9 歌頌の前に「生神女の歌の代わりに讃歌を歌う」と書いてあって、讃歌のページが示してありますが、これは間違いです。スラブ語で、同じ「崇め讃め」と始まる別の歌と混同されました。「崇め讃めよ」、スラブ語だと「ヴェリチャイ」で始まる別の歌、「ヘルビムより尊く」の代わりに歌う「イルモス第 9 歌頌の附唱」（我が霊や～～ 崇め讃めよ）のことです。この楽譜の左下赤丸で囲んだ「あがめほめよ」です。これも日本語の語順が違うので話がややこしくなりました。楽譜の指示は間違っていることもあるので、祈祷書で確認しなければなりません。



早課の終わりの「凡そ呼吸ある者」のスティヒラも「讃揚歌」と書かれることがあります。これも「主を讃め讃げよ」の「讃め揚げ」が題名になっていますが、讃歌とは別の歌です。

## Slide12

さて、ではいよいよ、お名前シリーズ、ポロキメンとア rilルイヤに進みます。特に聖体礼儀のポロキメンとア rilルイヤを中心にお話しします。

## Slide13

まず、ポロキメン。意味は諸説あって、「先立つ」「前に置く」などとも言われますが、はっきりわかりません。聖書の読みの前に行われ、歌詞の大半は聖詠の句です。聖体礼儀では小聖入の後、使徒経の読みの前、晩課では聖入（聖にして福たる）の後、祭日にはパレミヤ、旧約聖書が読まれる前に歌われます。早課では福音の読みのあるときに、アンティフォンの後、福音の読みの前に行われます。ですからポロキメンは基本的には聖書の読みの前に行われます。

## Slide 14

みなさん、お馴染みの聖体礼儀から話を始めましょう。聖体礼儀のポロキメンとア rilルイヤは同じ性質をもちます。

今は聖体礼儀の始まりに大連祷があったり、アンティフォンがあったり、トロパリがあったりしますが、昔、そうですね 1500 年ぐらい前のビザンティンでは、聖堂に入ると、すぐに聖書が読まれました。アンティフォンは外で歌う行列行進の歌で、今の小聖入は、昔は聖堂に入ってくる儀式だったという話は何度もしましたね。だから、聖体礼儀は今よりずっと短かった。聖堂に入ってすぐ聖書の読みです。

## Slide15

昔はまず、旧約聖書が読まれ、使徒の書が読まれ、福音書が読まれました。正教会の奉神礼では旧約聖書は新約で完成するハリストスの救いの預言として読まれました。カトリックでは、今は昔に戻って旧約聖書、使徒の書、福音書の順で読むようにしたそうです。正教会では旧約の読みは、圧縮されて、短くなってポロキメンになったと言われます。受難週には古い形が残っていて、旧約、使徒の書、福音書の順で読まれるところがあります。

## Slide16

それと同時に、ポロキメンやア rilルイヤは、これから読まれる使徒経や福音経の前ぶれ、ファンファーレの役割を果たしています。旧約の預言が歌われ、「いよいよ救いが成就したよ！さあ聴こう！」というわけです。

## Slide 17

また、これは一連の注意喚起でもありました。

さきほど、昔は、聖堂に入ってすぐ「聖書の読み」だったとお話

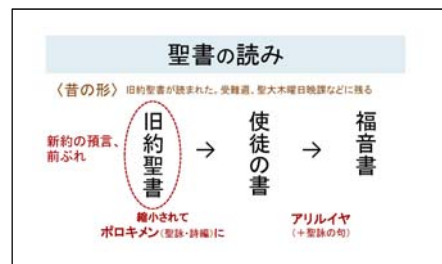
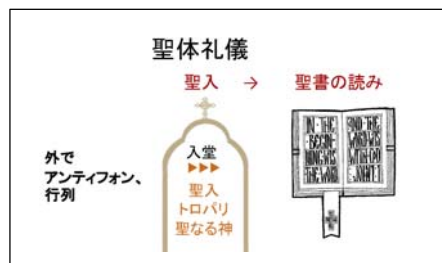
### 聖歌のお名前

- トロパリ (別名:イバコイ、セダレン、エクサポステイラリー)
- コンダク
- 領聖詞 キノニク
- カノン
- ステヒラ
- **ポロキメン と ア rilルイヤ**
- 讃歌

### ポロキメン Prokimenon

意味は諸説ある。聖書に先立つ。主に聖詠の句。

- **聖体礼儀**: 小聖入の後、使徒経の読みの前
- **晩課**: 聖入(聖にして福たる)の後、旧約聖書の読み(パレミヤ)の前
- **早課**: ポリエレイのあと、福音の読みの前





しましたが、想像してみてください。千人を超える大群衆が聖堂にどーっと入ってくる。ざわざわ、がやがや…。ポロキメンの前に、なんども「謹みて聴くべし」とか「叡智」とか輔祭の呼びかけがありますよね。実際、当うるさかったんだと思います。聖堂にはいつでも、あっちでもこっちでも、ざわざわ、がやがや。「うるさい！ 静かにせい！」と輔祭が叱る。さらに「肅みて聴くべし」「ご静肅に！」でしょう？ここでポロキメンを高らかに歌って気分を高めて、「さあ聴きなさい」、もう一度「肅みて聴くべし」で、やっと使徒経を読み始めるという流れです。

### Slide18

具体例として、復活祭のポロキメンを見てみましょう。この聖詠、第16聖詠は、古くは4世紀頃から復活祭に用いられていたようです。

輔祭が「肅みて聴くべし」（静かに聴きなさい）と呼びかけた後、司祭が「衆人に平安」（みなさんに平安があるように）、「爾の神°にも」（あなたの神°、霊にも）と答える。平安を祈り合う、これは聖書にもでてくるお決まりの挨拶です。パウエルの手紙の最初と最後に同じような挨拶が書かれています。

「叡智」は「ソフィヤ」知恵、です。「神の知恵だよ～」と宣言して、そのあと誦経者、昔は聖歌隊長、ソロの歌い手が「ポロキメン、第8の調べ」と唱えます。「第8の調べ」とは「第八調のメロディ」で歌うよ、ということで、歌われる調すなわちメロディの型を示し、お手本に歌い始めます。すると、それを真似て、聖歌隊に率いられた会衆が繰り返します。誦経者は次の句を歌い、会衆は先ほどの句を繰り返し、最後に誦経者は句の前半を唱え、会衆が続いて後半を歌います。

今は誦経者は、まっすぐに唱えるだけですが、本来、歌うものでした。だから歌ってもかまいません。が、自信がなければやめてください。こういう聖詠の掛け合いはビザンティン聖歌の基本形です。

### Slide19

ポロキメンが終わったら、再び輔祭が「叡智」と唱え、誦経者は「聖使徒行実の読み」とか「聖使徒パウエルが〇〇人に達する書の読み」と何が読まれるかを告げてから、「肅みて聴くべし」と促され「兄弟よ…」と使徒経本文を読み始めます。実際の使徒経の使い方は次回、後半で詳しく解説します。

### Slide20

読み終わったら、司祭が「爾に平安」「あなたに平安があるように」と読み手に挨拶し、誦経者は「あなたの神°、あなたの霊にも平安があるように」と返します。また、挨拶です。

### Slide21

次に「アリュイヤ」を聖詠の句と歌います。アリュイヤとはヘブライ語で「神を讃美せよ」ということばです。ハレルは賛美、ヤは

注意喚起

入堂後▶▶



輔祭 肅みて聴くべし Внимем

司祭 衆人に平安

誦経 爾の神にも

輔祭 睿智 премудрость


誦経 ポロキメン(〇〇の調べ)

輔祭 睿智 премудрость

誦経 聖使徒パウエルが…

輔祭 肅みて聴くべし Внимем

誦経 「兄弟よ…」(使徒経の読み)



例：復活祭のポロキメン(第16聖詠)

誦経(16) ポロキメン 聖八の調べ <<<パロディの型を示す

主はこの日を造れり、我等これを以て喜びましょう。<<<お手本で歌う


♪主はこの日を造れり、我等これを以て喜びましょう。<<<マ本する

誦経 (8) 主を讃美せよ、霊は仁慈にして、その憐れみは世々にあはれなり。

♪主はこの日を造れり、我等これを以て喜びましょう。

誦経 主はこの日を造れり、

♪我等これを以て喜びましょう。



輔祭 睿智、

誦経 聖使徒パウエルが〇〇人に達する書の読み

聖使徒パウエルが〇〇に達する書の読み

聖使徒イオンの公書の読み

聖使徒行実の読み

輔祭 肅みて聴くべし、

誦経 「兄弟よ…」(使徒経の読み)

使徒経の読み



「兄弟よ、……」

読み終わったら挨拶

司祭 爾に平安

誦経 爾の神°にも

ヤハウェのヤで神です。喜びの叫び、属神の詩賦、霊の歌です。

ここでは、福音の読みへの前ぶれ、ファンファーレとなっています。使徒経に対するポロキメンと同じ役目です。旧約の救いの預言がかなったことへの喜びの叫び、歓喜のファンファーレ。そういうふうに歌いたいですね。暗いのはダメです

Slide 22

復活祭のアリルイヤを、見てみましょう。今度は 101 聖詠です。第 1 句の「起きて」ということば、復活祭らしいですね。

誦経者がアリルイヤを 4 調のメロディで歌い、聖歌隊または会衆が同じメロディで繰り返します。誦経者は聖詠の句を詠い、会衆はアリルイヤを歌います。また誦経者は聖詠の句を詠い、会衆はアリルイヤを歌います。

最近句を挟んでアリルイヤを歌う教会が増えてきましたが、日本では長い間、句は歌われませんでした。これも革命前のロシアの習慣で、美しいアリルイヤの歌を聴かせるために、聖詠の句を省いてしまいました。さらに、このアリルイヤと句の繰り返しの時が福音の読みに向けた炉儀のタイミングなのですが、句を省いてしまったために、前倒しして、使徒経が読まれて居る間に炉儀が行われるようになり、鈴の音で『使徒経』が聞こえにくくしてしまいました。司祭が一人で行う場合など、炉儀のタイミングが難しいのだと思いますが、「使徒経」は聴こえるべきではないかと思えます。聖堂で「聴く」のは家で「読む」のとは違うのです。奉神礼の場では「何かが」働くのです。

それからアリルイヤも 8 つの調があります。メロディはポロキメンと同じパターンです。日曜日の場合、ポロキメンとアリルイヤは同じ長になるので、同じメロディが繰り返されることによって、その調が強調されます

Slide23

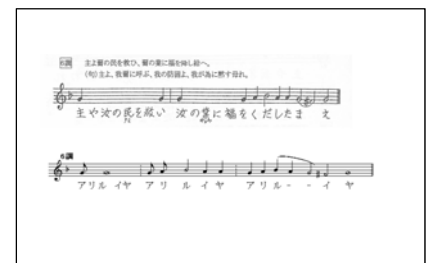
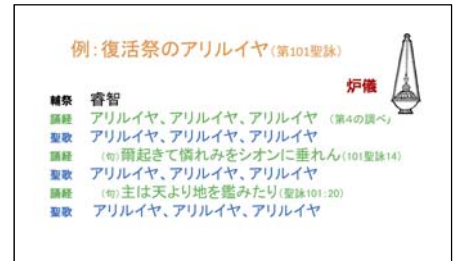
たとえば、1 調。日本で一般的に歌われている「アリルイヤ」は 1 調です。〈歌う〉正教会の歌作りでは、ことばによって多少の調整をしますから、頭の部分が少し違いますが、こうして並べてみると、同じ歌であることがわかります。

Slide24

あるいは 6 調。埋葬式に歌われるアリルイヤですが、ポロキメンと同じメロディです。

ある修道院長さんは 8 つの調とは、中央に十字架を立てた丸いケーキのようなものと言われました。切り口は違うけれど、同じ十字架を見ている、中心にしている。聖歌は「耳を楽しませる音楽」ではなく、「奉神礼の音楽」だ。8 つのメロディがあることにも意味があるはず。いきなり全部は無理かもしれませんが、今ご紹介した 1 調、6 調、それと 8 調はパニヒダの時歌っている「アリルイヤ・・・」ですから、できると思います。

日本の場合は、明治時代に、とりあえずこれだけでいいよ、と 1 調だけにしたのだと思います。できる



よくなったら、やってみましょう。です。

### Slide25

アリルイヤが終わると、輔祭も司祭の祝福を受けて、福音書を読みます。ここでも「衆人に平安」「爾の神<sup>o</sup>にも」というやりとり、挨拶があります。聖体礼儀には、こうしたやりとり、挨拶がたくさんあります。教会という神の民の集まり、共同体の働き、である現れです。互いの連携が欠かせません。

### Slide26

輔祭が読む場合は至聖所の方を向いて読みます。立ち位置は聖堂の中央、あるいはソレヤ、王門前の高くなったところですが、司祭が読む場合は会衆の方を向いて読みます。

読み終わると「主や、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す」が歌われ、説教が行われます。説教は領聖の前や聖体礼儀の終わりに行われることもあります。本来の位置は福音書の読みのおとです。なぜなら、説教は、今読まれた福音の解き明かしだからです。

### Slide27

聖体礼儀以外のポロキメンについて簡単に解説します。

ひとつは晩課のポロキメン、もうひとつは早課の福音の読みの中のポロキメンです。早課のポロキメンは八調経、祭日経などの大きな祈禱書、歌を集めた祈禱書に出っていますが、

### Slide28

晩課のポロキメンは、祭日とは関係なく「曜日」で変わり、毎日の時間の祈りの枠組みとなる祈禱書『時課経』に載っています。大祭であっても、前の日のポロキメンは曜日に従います。

日曜日から金曜日まではポロキメンは2つの聖詠の句でできています。でも、土曜日は4つの句になっています。

### Slide29

たとえば月曜日はこうです。歌は2回半です。

誦経：我よべば主は之を聴く。(4調)

聖歌：我よべば主は之を聴く。

誦経：(句) 吾が義の神や、吾がよぶ時我に聴き給へ。

聖歌：我よべば主は之を聴く。

誦経：我よべば

聖歌：主はこれを聴く

となりますが

### Slide30

土曜日は日曜日に続く特別の日なので、特別に句が3つの大ポロキメンになります。歌は4回半になり、こうなります。

輔祭 君や、聖使徒及び福音者(某)の福音を宣ふる者に祝福せよ。  
 司祭 (十字を描いて)、爾は神光栄にして讃美たる聖使徒及び福音者、其の祈禱に依りて、爾(なんじ)福音を宣ふる者に多くの力ある言を賜わん、其至愛の子我が主イイス・ハリストスの福音の行わられたるなり。  
 輔祭 「アミン」

(輔祭は福音書の前に結ばし福音書を掲げて王門を出て升壇または指定された場所に立つ、司祭至聖の前に立ち、吾に向かつて)

司祭 (高声) 睿智、衆みて立て、聖福音経を聴くべし。  
 衆人に平安。  
 聖歌：爾の神<sup>o</sup>にも。  
 輔祭 (某) 伝の聖福音経の読み。  
 聖歌：主や、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。  
 輔祭 福音経を読み

### 福音経の読み



聖歌：主や、光栄は爾に帰す  
光栄は爾に帰す。  
(説教)

### その他の ポロキメン Prokimenon

- 晩課：聖入(聖にして福たる)の後、旧約聖書の読み(パレミヤ)の前 曜日で変わる…時課経(大斎は三歌斎経)
- 早課：ポリエレイ、アンティフオンの後、福音の読みの中…八調経、祭日経など

### 晩課のポロキメン 『時課経』P185 『ひらがな時課経』P84

(日) 主の諸僕夜中主の堂に立つ者や、今主を衆め讃めよ。  
 (句) 爾の手を掲げ聖所に向かて主を衆め讃めよ。  
 (月) 我よべば主は之を聴く。  
 (句) 吾が義の神や、吾がよぶ時我に聴き給へ。  
 (火) 主や、爾わくは爾の仁慈と恩徳は吾が生命あるの日夜に伴はん。  
 (句) 主は我の救者なり、我方難に止かざらん、彼は我を汝き奉給に外はず。  
 (水) 神や、爾の名をばて我を救ひ、爾の方をばて我を助給へ。  
 (句) 神や我が徳を聞き我が口の言を祈き聴給へ。  
 (木) 我が助けは天地を創りし主より来たる。  
 (句) 我が助けは我を救ひ、我が助けは我を助給へ。  
 (金) 我が神を憐れむ者は我に先だたん。  
 (句) 我が助けは我を救ひ、我が助けは我を助給へ。  
 (土) 主は王たり、彼は威厳を衣たり。  
 (句) 主は能力を衣、又之を帯にせり。  
 (句) 故に世界は堅固にして動かざらん。  
 (句) 主や、聖徳は爾の家に顕して永遠に至らん。

### 晩課のポロキメン

一曜日で変わる一

平日(たとえば月曜日) 歌は2回半  
 誦経：我よべば主は之を聴く。(4調)  
 聖歌：我よべば主は之を聴く。  
 誦経：(句) 吾が義の神や、吾がよぶ時我に聴き給へ。  
 聖歌：我よべば主は之を聴く。  
 誦経：我よべば  
 聖歌：主は之を聴く

### 晩課のポロキメン---曜日で変わる

土曜日(大ポロキメン)  
 誦経：主は王たり、彼は威厳を衣たり。(6調)  
 聖歌：主は王たり、彼は威厳を衣たり。  
 誦経：(句) 主は能力を衣、又之を帯にせり。  
 聖歌：主は王たり、彼は威厳を衣たり。  
 誦経：(句) 故に世界は堅固にして動かざらん。  
 聖歌：主は王たり、彼は威厳を衣たり。  
 誦経：(句) 主や、聖徳は爾の家に顕して永遠に至らん。  
 聖歌：主は王たり、彼は威厳を衣たり。  
 誦経：主は王たり  
 聖歌：彼は威厳を衣たり

誦経：主は王たり、彼は威厳を衣たり、（6調）  
 聖歌：主は王たり、彼は威厳を衣たり、  
 誦経：（句）主は能力を衣、又之を帯にせり、  
 聖歌：主は王たり、彼は威厳を衣たり、  
 誦経：（句）故に世界は堅固にして動かざらん、  
 聖歌：主は王たり、彼は威厳を衣たり、  
 誦経：（句）主や、聖徳は爾の家に属して永途に至らん、  
 聖歌：主は王たり、彼は威厳を衣たり、  
 誦経：主は王たり  
 聖歌：彼は威厳を衣たり

日本ではなぜか、普通の日のポロキメンと形を合わせて、句を続けて読んで、2回半にまとめてしまっています。また晩課のポロキメン、まっすぐに歌われることが多いのですが、大阪では6調のメロディで「主は王たり、彼は威厳を衣たり」と歌っています。

（追補：ここで読み手は誦経と書きましたが、通常は司祭または輔祭が行うことが多いようです。）

### Slide31

復活祭、五旬祭、降誕祭などの祭日の夕方行われる晩課、聖体礼儀の行われた後の晩課では特別の大ポロキメンが行われます。「何の神か我が神・・・」。こちらは祭日経や五旬経などの祈祷書に出ています。

そのほかにも、特別のポロキメンが行われるのは、大斎に向かう『赦罪の晩課』。「爾の顔を爾の僕に隠すなかれ」形式としては同じ大ポロキメンの形です。覆いの掛け替えをするときです。

**大ポロキメン**

- 祭日晩課
  - 降誕祭晩課 「何の神か、我が神・・・」
- 特別の主日
  - 赦罪の晩課 「爾の顔を爾の僕に・・・」
  - 復活祭晩課 「何の神か、我が神・・・」
  - 五旬祭晩課 「何の神か、我が神・・・」

### Slide32

早課のポロキメンは福音の読みがあるときだけ行われます。日本だと、主日と祭日しか知らないのが、晩課では毎回ポリエレイがあって、福音が読まれるような印象がありますが、早課のポロキメンが歌われるのは大きな祭日、日曜日も含めて特別の時だけです。

早課のポロキメンも、まっすぐに歌われることが多いですが、8調あります。大阪ではズナメニイという古いロシア聖歌のメロディで歌っています。その音楽付けするときに気付いたことですが、8つの調のほとんどに「起きる」あるいは「興きる」ということばが入っています。日曜日は復活の日なのだとこのことを改めて思いました。だから「起きる」が強調されるような音楽付けを心がけました。たとえば1調はこうです。

**早課のポロキメン**

- 福音の読みがあるときだけ
- 8つの調のメロディで

### Slide33

最後に、聖体礼儀以外のア ril li ya について、簡単に説明します。「我が霊、103 聖詠」のように最後に3回繰り返されるもの、「悪人の謀」では「ア ril li ya」がリフレインになっています。そのほかに早課のはじまり「主は神なり」のかわりに歌われる「ア ril li ya」があります。大斎ではイザヤ書の一節、またパニヒダでは聖詠

**そのほかのア ril li ya**

- 103聖詠「我が霊」の最後に3回
- 「悪人の謀」のリフレイン
- 「主や爾は崇め讃めらる」の最後に3回 etc.
- 「主は神なり」のかわりに「ア ril li ya」
  - 大斎：イザヤ26:9、11、15
  - パニヒダ 第9聖詠など



と交互に歌われます。大きな祭日では「主は神なり」が歌われ、平日や大斎では「ア ril イヤ」になります。

面白いのは、カトリックのミサでも福音の読みの前にア ril イヤ、アレヤが歌われますが、レント、すなわち大斎や降誕祭の前の斎時期にはアレヤは歌わない規定になっているそうです。正教会ではむしろ、斎の時にア ril イヤが歌われるのと対照的ですね。

### Slide33

ポロキメンとア ril イヤ、最初は実技編も続けて使徒経の見方や使い方を、続けてお話するつもりでしたが、長くなったので2回に分けました。後編は8月20日になります。

奉神礼基礎講座、準備に時間がかかるので、秋からは隔月、偶数月の第3土曜日にします。新しいシリーズで、実写のビデオを見ながら、聖体礼儀や徹夜祈の解説と歌い方の工夫を紹介していこうかと思っています。

